

## 大会規程細則

一般財団法人日本リトルシニア中学硬式野球協会（以下「本協会」という。）の主催する大会全ての運営が、円滑に運ばれることを目的として、ここに大会規程細則（運営要項、野球特別規則）を定める。各チームの指導者は、大会参加にあたり、本細則を熟読し、大会の運営に協力すること。

### 運 営 要 項

（チーム編成、変更、用具等）

- (1) 本協会の主催する野球大会に出場する各チームは、必ず20歳以上の責任者が引率し、大会中選手の全ての行動、並びに応援等に対し責任をもち、チームを管理しなければならない。監督は20歳以上、コーチは18歳以上とする。移行までに2年間の猶予を設ける。監督とコーチは練習・試合における責任者であり、チーム運営においては会長、副会長、事務局長に従わなければならない。
- (2) 選手数が不足している（9人以下）2チーム以上の「合併チーム」あるいは近隣チームから選手を借り入れての「他チーム選手応援チーム」が本協会の主催する野球大会に参加することを認める。詳細は規程集 P39「選手不足による大会参加の特別措置について」参照。
- (3) 複数チームの大会参加を認める。詳細はP41「複数チームの大会参加規程」参照。**
- (4) 選手の登録変更は、所定の用紙に変更理由を記載し、監督会議の開始時刻前迄に大会本部に提出すれば認める。それ以降の変更は認めない。選手の登録変更については、怪我等による選手変更は認めるが、新規に選手を増やすことは認めない。
- (5) 大会中、不慮の負傷・疾病に対して主催者（各球場大会本部）は、応急手当を施すがそれ以上の責任は負わない。
- (6) ユニフォーム、帽子、ストッキング、靴、スパイク、コートや、ヘルメット、グローブ、バット、キャッチャー道具、サングラスの使用などについては、別途定める「リトルシニア野球用具の使用規程」による。
- (7) 本協会を代表して海外遠征をする日本チームに対して、遠征に関わる経費について援助することができる。

（試合前手続き）

- (8) 本協会の主催する野球大会に出場する各チームの選手、監督、コーチは、必ず所定のワッペンを左の肩口に付けた同一のユニフォーム（帽子、アンダーシャツ、靴下、ストッキング、靴、コートを含む）を着用し、選手の背番号は1～25、監督は30、コーチは40、50、60、70を付けること。なお、スコアラーはスコアラーの仕事のみ行うものとし、ベンチに入らない登録コーチ、登録に関わらず選手のスコアラーを認め、選手以外はベンチにユニフォームではなくスポーティーな服装で入ること。
- (9) ベンチ内には、登録選手25名以内と登録した監督、コーチ（登録4名のうち2名）、スコアラーの他は入れない。
- (10) 監督が不在の時は、登録コーチが指揮を執り、その旨を当日試合開始前に各球場本部に口頭で伝える。スコアラーの変更も同様に口頭で伝えるものとする。
- (11) 各試合は、天候並びに球場の都合によって、試合開始予定時刻を変更することがある。

- (12) 各チームは、試合開始予定時刻 40 分前に球場に到着し、本部に登録書（選手登録証「カード」、指導者登録証「カード」を含む）、投球数確認シート**様式 A**（原本とコピー2部）を提出し、大会役員または審判員による確認を受ける。登録証がない者はベンチ入りできない。
- (13) 試合開始予定時刻に不在のチーム及び規定の登録書（登録証も含む）未提出のチームは、不戦敗とする。
- (14) 各チームの主将は、試合開始時刻 30 分前、または前試合 4 回終了後（コールドゲームのときは試合終了次第）所定のメンバー表 5 通を本部に提出し、同時に審判員立ち会いのもとで、攻守を決定する。
- (15) ベンチサイドは、大会組合せ抽選番号の若い方を 1 塁側とする。

(試合後の手続き)

- (16) 試合終了後に、監督は投球数確認シート**様式 A**（原本）、選手登録書（選手登録証「カード」を含む）を引き取ること。大会本部は試合終了後、引き取りのない選手登録書の責任は負わない。

(試合前の練習、グラウンド整備)

- (17) ノック時間は、7 分以内とするが、大会運営の都合により時間を短縮したり、ノック無しで試合を開始することもある。なお、ノック時のボールボーイは、危険防止のためヘルメットを着用する。
- (18) ノック後試合開始前及び試合終了後のグラウンド整備は、原則としてベンチ入り両選手により迅速に行う。なお 4 回終了時のグラウンド整備は球場の状況によって、実施の有無を決定する。

(試合中の配慮事項)

- (19) 攻撃側チームは、各イニングの先頭打者とベースコーチはミーティングに参加せず、所定の位置につくこと。
- (20) 次試合のチームのバッテリー 1 組に限り、前試合の 5 回終了時からブルペンに入って投球練習を行うことができる。ただし、4 回コールドで終了した場合はこの限りではない。
- (21) 試合進行を速めるよう配慮し、攻守交代は全速力で行うこと。  
ボールまわしは内野手 1 回とし、投手への返球は原則としてその守備位置から行うこと。  
なお、試合の進行上、また、天候状況によっては審判員の判断で変更することがある。
- (22) 捕手は、投手に返球したり野手に声を掛けるために、1 球毎にホームプレートの前に出ないこと。

(コート類の着用制限、身なり)

- (23) グラウンド内に入る選手、監督、コーチは、コート類の着用を禁止する。  
プレイ中の選手は勿論、ブルペンで練習中の投手・捕手も含む、また、グラウンドに出ている選手はユニフォームの下に着込んでもいけない。  
ただし、ダッグアウト内及び走者となった投手は除くほか、特に寒い日や雨天等の場合は、審判員の判断により許可する。
- (24) 選手、監督、コーチ及びスコアラーは、不快感を与えるような長髪、ひげ、茶髪は極力控え、清楚な恰好で大会に臨むこと。なおピアスは禁止する。

(ベンチ内留意事項)

- (25) ベンチ内で携帯マイクの使用は禁止する。監督に限りメガホンの使用を認める。
- (26) 相手チームや、相手方選手、審判員に対する野次等は、ベンチ内選手はもとより、応援者もこれを禁止する。なお、ベンチ及び応援者のマナーについては、大会役員及び審判員が監督経由で注意する。
- (27) ベンチ内で携帯電話、タブレット端末やパソコン等電子機器を持ち込み、外部と情報交換することを禁止する。

### 監督、指導者に対する注意事項

- (1) 監督会議で説明または定められた事項は、チーム全員に徹底させること。
- (2) 監督、コーチは出場選手に対し中学生らしい態度で試合を行うように指導する。
- (3) 試合中監督、コーチ及びスコアラーは、特別の理由の無い限りみだりにベンチ、またはダッグアウトを離れないこと。
- (4) 試合中および練習中に、指導者が選手に対し、暴力や体罰などの行き過ぎた指導があれば、規程第9条に則り連盟より厳しい処置を科す。
- (5) 如何なる理由があっても、監督は判定を不服として試合中に選手をグラウンドよりベンチに引揚げさせてはならない。公認野球規則 7.03 を適用する場合もある。
- (6) 監督は、自チームの応援団の行為について責任を持つこと。
- (7) 応援団の用具はメガホンのみ認めるが、メガホン同士をたたくことや、鐘、太鼓、笛、ペットボトルなどの鳴り物は禁止する。また、投手が投球動作を起こすと同時に、歓声を挙げることもあるが、その度合いが過ぎると判断したときは、当該審判員または大会役員が監督経由で注意を与える。
- (8) 監督、コーチ、スコアラー及び選手はスタンドの応援団とみだりに私語を交わしてはならない。

### 選手に対する注意事項

- (1) 選手は、常にスポーツマンらしいきびきびとした動作でプレイすること。
- (2) 試合開始及び終了時の挨拶に、両チーム選手間で奇声を発しないこと。また、本部及び相手方ベンチ前に行って挨拶しないこと。
- (3) 3アウト後、試合球は投手板付近に置くこと。雨天時は審判員に渡すこと。
- (4) 球審からボールを受け取る投手、予備ボールを手渡す選手及びバッターボックスに入る打者は、その都度球審に礼をしなくてもよい。
- (5) 試合開始時と終了時に両チームは、ホームプレートをはさんで整列し、審判員の指示で礼を交わすこと。

## 宿舎での注意事項

### 1. 一般事項

- (1) 大会期間中各チームは、引率責任者及び伝達事項を受ける責任者を定め、大会期間中の連絡場所等（宿舎、電話番号、部屋番号、その他必要事項）を記載し、大会本部へ届け出ること。
- (2) 宿舎での貴重品等の管理は、各チームで責任を持って行うこと。フロントに預けない物については、全てチームまたは本人の責任とし、大会本部及び宿舎は責任を負わない。

### 2. 選手への注意

- (1) 試合中は勿論のこと宿舎内においても、各連盟の代表チームであること、リトルシニアの選手であると同時に、中学生であることを十分に自覚し、他の範となる良識ある行動をとること。
- (2) 宿舎は一般の宿泊者も同宿しており、宿舎内においては他の迷惑とならないよう、特に次のことに留意すること。
  - ア. 廊下では、駆けたり大声を発しない。
  - イ. エレベーターの利用にあたっては、割り込みをせず、他に先を譲るゆとりを持ち、出来る限り階段を利用すること。
  - ウ. 入浴にあたっては、悪ふざけをしないで浴槽及び脱衣所を清潔にすることを心がけ、濡れたまま上がらないこと。
  - エ. 食堂へは、清潔な服装で入場し、余分な物を持ち込まないこと。
  - オ. 室内は、常に整理、整頓、清掃を心がけること。

## 野球特別規則

### (競技場特別ルール)

- (1) 競技場に特別ルールがあるときは審判員は、各試合前に監督立ち会いのもとにこれを告知し競技にあたらなくてはならない。
- (2) 各大会において球場使用時間制限等がある場合、その当日の最終試合は制限時間まで1時間45分あれば試合を行う場合もある。

### (試合の成立)

- (3) 各試合は、7回戦とし5回終了をもって正式試合とし、4回終了時10点差、5回終了時以降7点差以上の場合、コールドゲームとする。ただし、決勝戦はコールドゲームを適用しない。

### (時間制限と試合成立の関係)

- (4) 試合は2時間制限試合とし、5回以降試合開始から2時間を超えては新しいイニングに入らず、制限時間に達した時点でのイニング(表裏)を最終回とし、そのイニング終了時点で同点の場合は、それ以降はタイブレーク方式を採用する。ただし、決勝戦は2時間制限試合を適用しない。
  - ① 試合が成立するのは5回終了なので、4回以前に2時間が経過した場合でも5回までは継続して行う。
  - ② 5回以降、後攻チームがリードしている試合で、後攻チームの攻撃中に2時間に達した場合はその時点で試合を打ち切り後攻チームの勝利とする。
  - ③ 同じく後攻チームがリードしている試合で、先攻チームの攻撃中に2時間に達し、後攻チームのリードのまま先攻チームの攻撃が終了した場合は、その時点で試合を打ち切り、後攻チームの勝利とする。

### (中断)

- (5) 2時間の制限時間において、次の場合による中断は試合時間に計測しない。
  - ① けが等により、選手の治療を要する時間。
  - ② 降雨、強風、雷等の荒天(以下「荒天」という。)により、試合続行が不可能な場合
  - ③ その他不測の事態により、審判員が必要と認めたもの

### (タイブレーク・決勝戦同点の場合の決定法)

- (6) 7回終了時同点の場合2時間以内であっても延長戦は行わず、タイブレーク方式に入る。タイブレーク方式は、1アウト満塁で打者は前回正規に打撃を完了した次の打順の打者とする。走者は前項による打者の前の打順の者が一塁走者、その前の打順の者が二塁走者、三塁走者は二塁走者の前の打順の者とする。この場合の代打、代走は認められる。  
タイブレーク方式は3イニングまで継続できるが未決着の場合は抽選とする。  
抽選は審判員が○×其々9個のくじを用意し、最終守備、攻撃の18人がくじを引き○の多かったチームを勝ちとする。なお、タイブレーク方式中に荒天等で試合続行不可能になった場合は、試合を中断し抽選とする。
- (7) 決勝戦には2時間制限試合を適用せず、7回同点の場合は延長戦に入り最長9回まで行う。延長9回終了時なお同点の場合は、10回からタイブレーク方式に入り勝敗が決着するまで行う。

### (特別継続試合)

- (8) 荒天、日没その他の理由により試合続行が不可能となった場合で、(3)で定める試合が成立していない場合、後日、前の試合の回と経過時間を引き継ぎ特別継続試合を行う。なお、特別継

続試合の日程等は大会本部で決定する。

(危険防止措置)

- (9) 打者、走者、ランナーコーチ、ボールボーイは、危険防止のため両耳付きヘルメットを着用する。また、捕手は、バイク（急所防具）及び捕手用具を着用のこと（投球練習及びブルペンにおいても同様とする）。
- (10) ブルペンでの投球練習中、打球防護のためヘルメットとグラブを着用した打球監視選手を付ける。
- (11) 次打者若しくは正規の代打者は、自軍のウエーティングサークル内で待ち、投手が投球動作に入ったら、自身の安全のため素振りをやめ、投球、打球をしっかりと見守る。また、守備を妨害するような行為をとってはならない。

(投手)

- (12) 投手は、投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。セット**ポジション**の姿勢でサインを見る場合は、片方の手を下におろして身体の横につけていなければならない。**投球姿勢におけるワインドアップポジション及びセットポジションの足の位置について、2022年度に公認野球規則が改正されたが、本協会はいままでどおりとする。**
- (13) 投手は、捕手、その他の内野手または審判員からボールを受けたあと、走者がいない場合には12秒以内に、走者がいる場合には20秒以内に投球しなければならない。違反した場合、球審は走者が塁にいない場合にはただちにボールを宣告し、走者がいる場合は警告を発することとし、同一の投手が2度繰り返したら、3度目からはその都度ボールを宣告する。なお、塁に牽制球を送球したときは、20秒の計時をリセットする。なお、適用の詳細については、P37(参考)公益財団法人日本野球連盟の「投手の12秒及び20秒ルールの適用に関するガイドライン」による。
- (14) 投手の肘・肩の障害を予防するため、投球に関しては、**本協会が定める「投球数制限に関する統一ガイドラインに従う。他団体との交流戦で必要あるときは、日本中学硬式野球協議会が定める「中学生投手の投球制限に関する統一ガイドライン」に従う。**

(打者)

- (15) 打者は、みだりにバッターボックスを出ることは許されない。たとえタイムを要求しても、審判員がタイムを宣告しない時はインプレーとする。

(臨時代走)

- (16) 試合中選手に不慮の事故が起き、攻撃側チームより臨時代走（コーティシーランナー）の申し出があった時、審判員がその必要を認めれば、守備側チーム監督に事情を説明して許可する。臨時代走者は、事故のあった走者より打順が一つ前位のプレーヤーを選ぶこととし（但し投手は除く）、臨時代走はその場限りとする。守備側チームによる指名権はない。

(ラフプレー)

- (17) 選手の安全を守るため、故意に相手方選手を傷つけるような行為があった場合は、当該審判員の判断により、その選手を退場させることがある。

(ハーフスイング)

- (18) ハーフスイングの裁定については、公認野球規則 8・02 (c) [原注 2] を適用する。

- ①捕手は、打者を指し口頭で‘スイング’‘振った’と球審に確認を要請することができる。
- ②捕手が一塁や三塁塁審に対して直接指さし、リクエストはできない。
- ③また、監督は打者が振ったか否かの確認要請について、ベンチ内から捕手に指示することができる。

(監督の抗議及び通告)

- (19) 抗議及び選手交代の通告は、必ず監督が行う。監督不在の場合は、運営規程に定めた監督代行者が代行する。なお、抗議について以下の規定は公認野球規則による。
- (20) ストライク・ボール、アウト・セーフ及びフェア・ファールボールの裁定に限らず、審判員の判断に基づく裁定は最終のものであるから監督、コーチ、選手及び控えの選手がその裁定に対して異議を唱えることは許されない(公認野球規則 8・02(a))。
- (21) 審判員の裁定が規則の適用を誤って下された可能性のあるときには、監督が当該審判員に規則摘要の訂正を申し出ることができる(公認野球規則 8・02(b))。

(審判員の裁定)

- (22) 控え審判員を含む審判員の合議の裁定は最終判定となる(公認野球規則 8・02(c))。
- (23) 審判員は、この規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている(公認野球規則 8・01(c))。

(監督の指示及び野手が投手のもとに集まれる回数制限)

- (24) 監督が1試合(7イニングス)に投手のもとへ行ける回数を2回までとする。ただし、投手を交代させた場合は回数として数えない。時間は審判員がタイムを宣告後30秒以内とする。
- (25) 監督が、1イニングに同一投手のもとに2回行った場合及び、1試合に2回投手のもとへ行ったら、3回目に行けばその時の投手は自動的に交代する。ただし、交代した投手は他のポジションにつくことができる(公認野球規則 5.10 (d)【原注】の前段は適用しない)。タイブレーク及び延長回に入った場合、監督はそれ以前の回数に関係なく2イニングスに1回、投手のもとへ行けることができる。
- (26) 2人以上の野手が投手のもとへ行ける回数を3回までとする。投手交代の際、監督と共に野手がマウンドに集まることは、回数として数えない。タイブレーク及び延長回に入った場合、野手はそれ以前の回数に関係なく1イニング1回投手のもとへ行けることができる。
- (27) 攻撃側の監督が打者または走者に指示を与える回数を、1試合(7イニングス)に3回までとする。時間は審判員がタイムを宣告後30秒以内とする。タイブレーク及び延長回に入った場合、攻撃側の監督はそれ以前の回数に関係なく2イニングスに1回、打者または走者に指示を与えることができる。
- (28) 監督は、相手チームのタイム中に打者、走者に指示を与えることができるが、プレイの再開を遅らせた場合は、攻撃側監督のタイム1回と数えられる。

注1. 監督が投手のもとへ行ったかどうかの判断は、ファールラインを越えたか否かを基準とする。

注2. 野手が投手のもとへ行ったかどうかの判断は、各塁を結ぶ線と投手板の中間点を越えたか否かを基準とする。

(マナーアップ、スピードアップ)

- (29) マナーアップ、スピードアップについて

① 試合中のマナーアップを図るため、以下の点を順守すること。

- ア.塁上の走者やベースコーチ等が守備側のサインを盗み打者等に知らせることは禁止する。
- イ.得点した時、選手のリーダーが音頭を取り、声を揃えて手拍子する行為は自粛する。
- ウ.本塁打を打った選手をベンチから出ての出迎えは禁止する。
- エ.捕手が投球を受ける際、ストライクに見せる意図でミットを動かすことを禁止する。
- オ.捕手が投球を受ける際、極端にキャッチャースボックスから出て構えることを慎む。
- カ.勝敗が決定したとき等に、必要以上に大騒ぎをすることを慎む。

② 試合中のスピードアップを図るため以下の点を順守すること。

監督の行動

- ア.監督のマウンドへの行き帰りは、小走りでスピーディーな行動をとる。
- イ.複雑なサインによる時間のロスをなくし、速やかにサインを出す。
- ウ.選手交代時はできるだけ交代選手を事前に準備させ明確にかつ簡潔に球審に告げる。
- エ.攻守交替(攻撃)の時、ベンチ前ミーティングは短くし、速やかに選手をベンチに入れる。

選手の行動

- ア.バッテリーのサイン交換は速やかに行う。
- イ.投球のインターバルは長くせず、テンポ良く投球しスピードアップを心がける。
- ウ.捕手の防具装着は控え選手が手伝い速やかに守備につく。
- エ.投球がワンバウンドした時、不必要に毎回球審にボール交換を要求しない。
- オ.スパイクシューズのひもの結び直しでタイムを取らないように事前に確認する。
- カ.タイムでマウンドに集まった後、駆け足で守備位置に戻る。
- キ.準備投球は、球審とバッテリーが準備投球数を確認し投げさせることとする。ただし上限の目安としては1分、8球とする。急遽登板しなくてはならなくなった投手には、状況に応じて臨機応変に対応する。公認野球規則 5.07 (b) 準備投球に基づくものとする。
- ク.ベンチ前でのキャッチボールは禁止する。

**附 則**

この規程は、次のように改正する。

- 改正 平成 13 年 5 月 12 日
- 〃 平成 24 年 10 月 1 日
- 〃 平成 24 年 6 月 1 日
- 〃 平成 28 年 12 月 7 日
- 〃 平成 30 年 5 月 26 日
- 〃 令和元年 7 月 31 日
- 〃 令和元年 10 月 5 日
- 〃 令和 3 年 6 月 1 2 日
- 〃 **令和4年3月2日**



2015年1月16日

(参考) 投手の12秒及び20秒ルールの適用に関するガイドライン

公益財団法人 日本野球連盟  
公益財団法人 全日本大学野球連盟

社会人及び大学野球の試合のスピードアップに関する特別規則第2項「12秒及び20秒ルール」に関するガイドラインは以下のとおり適用することとする。

1. 12秒及び20秒ルール

投手は、捕手、その他の内野手または審判員からボールを受けた後、走者がいない場合には12秒以内に、走者がいる場合には20秒以内に投球しなければならない。違反した場合、球審は走者が塁にいない場合にはただちにボールを宣告し、走者がいる場合は警告を発することとし、同一の投手が2度繰り返したら、3度目からはその都度ボールを宣告する。

なお、塁に牽制球を送球したときは、20秒の計時をリセットする。(社会人及び大学における試合のスピードアップに関する特別規則2参照)

2. 計時

計時は2塁塁審が行う。

3. 12秒ルールの適用

- ① 走者がいない場合に適用する。
- ② 12秒の計時は、投手がボールを所持し、打者がバッターボックスに入って投手に面した時に始まり、ボールが投手の手から離れた時に終わる。  
※投手が投手板についているかどうかに関係なく、打者の準備が整った時に計時を始める。
- ③ 12秒を経過したとき(13秒になったとき)、2塁塁審はタイムを宣告し、球審に12秒が経過したことを知らせる。  
※ 2塁塁審のタイムの宣告と同時にボールデッドとなる。  
※ タイムの宣告にもかかわらず投手が投球したり、その投球を打者が打ったとしてもそれは無効となる。
- ④ 2塁塁審の知らせを受けた球審は、ボールを宣告する。その際、球審は投手及び守備側の監督に12秒ルールを適用したことを告げる。

4. 20秒ルールの適用

- ① 走者がいる場合に適用する。
- ② 20秒の計時は、次のときに始まり、いずれの場合も投手の手から離れたときに終わる。
  - A) イニングが始まる時やボールデッドになったときは、球審がプレイを宣告したとき。
  - B) ボールインプレイの状態、新しい打者が打撃を開始するときや、打者がバッターボックスの外に出ざるを得なくなったときなどは、投手がボールを所持し、打者がバッターボックスに入って投手に面したとき。  
※ 投手が投手板についているかどうかに関係なく、打者の準備が整ったときに計時を始める。
  - C) ボールインプレイの状態、打者がバッターボックス内で打撃を継続しているときは、投手が捕手や他の野手からボールを受け取ったとき。

- ③ 1 度目・2 度目に 20 秒を経過したとき (21 秒になったとき)、2 塁塁審はタイムを宣告し、球審、投手及び守備側の監督に 20 秒が経過したこと及びその回数を知らせる。
- ④ 3 度目に 20 秒を経過したとき (21 秒になったとき)、2 塁塁審と球審は、走者がいないときと同様の処置をする。
- ⑤ 投手が塁に牽制球を送球したときは、20 秒の計時をリセットする。  
※ 投手板をはずしただけのときや偽投の時は、計時を継続する。

## 選手不足による大会参加の特別措置について

一般財団法人日本リトルシニア中学硬式野球協会（以下「本協会」という。）に加盟するチームで、選手数が10名に満たないチームの大会参加について、特別措置を以下に定める。

### （1）選手数不足チームによる2チーム以上合併した「合併チーム」での大会参加

- ア 原則として選手数が9人以下であるチームは、2チーム以上合併したチームでの予選を含む各連盟大会及び全国大会参加を認める。
- イ 合併チームは、原則、同一支部又は同一ブロック内の加盟チーム同士に限定し、週1回程度の合同練習ができることが望ましい。判断は各連盟に委ねる。
- ウ 合併チームを編成する際には、選手数不足チームと合併する他チームの選手数の合計が、25名以内を原則とする。

### （2）選手数不足チームが近隣チームから選手を借りた、「他チーム選手応援チーム」の大会参加

- ア 合併する適当な相手チームが無いなどの理由で、（1）の合併チームが組めない選手数不足チームは、近隣チーム（同一支部又は同一ブロック内）の協力を得て選手を借り入れた「他チーム選手応援チーム」での大会参加を認める。

ただし、母体となる選手数不足チームの選手数は、最低4名が在籍しているものとし、他チームからの選手を借り入れた後の当該チームの選手数は**13**名を超えないこととする。

※例 選手数不足チームの在籍選手数	4名の場合	→	最大 <b>9</b> 名を借入可能
	5名の場合	→	最大 <b>8</b> 名を借入可能
	6名の場合	→	最大 <b>7</b> 名を借入可能
	7名の場合	→	最大 <b>6</b> 名を借入可能
	8名の場合	→	最大 <b>5</b> 名を借入可能
	9名の場合	→	最大 <b>4</b> 名を借入可能

- イ 上記アで選手を貸し出すチームは、選手本人の意思と自主性を尊重し、保護者の同意を得ること。

### （3）上記（1）（2）で認めたチーム（以後「合同チーム」という。）の大会参加申し込みと責任者

- ア 合同チームの組織は、当該大会（予選を含む各連盟大会及び全国大会）ごとに、所定の用紙に必要事項を記入し、所属連盟に届け出て承認を得ること。
- イ 大会参加申し込みは、合同チームを構成するチーム会長の承認印を必要とする。
- ウ ベンチ入りする監督、コーチ、スコアラーは、合同チームを構成する会長の協議により選任し、所属連盟に登録する。また、試合当日は、合同チームを構成するチームの引率責任者が自身の選手を引率するものとし、ベンチ入りできないチーム役員も観戦し、常に待機すること。
- エ 大会参加の名称は、合同チームを構成するチームで協議し、連名、又は頭文字を組み合わ

せたものなどいずれでもよい。

- オ 合同チームで全国大会等へ出場する場合、予選を含む各連盟大会で登録した役員、選手で出場すること。

(4) ユニホームなどの用具等について

次の用具については、特に合同チーム内では統一する必要はない。

帽子、ユニホーム上下、アンダーシャツ、ストッキング、スパイク、ウインドブレーカー、ヘルメット

(5) その他の問題

合同チームに関して、上記以外で生じる問題については、当該ブロック又は支部、当該連盟、本協会がその都度協議し判断する。

## 複数チームの大会参加規程

チームの選手数が多いことにより、一つのチーム（以下「母体チーム」と言う）から複数のチーム（以下「子チーム」と言う）が日本協会および各連盟主催の大会に出場できることとし、その規程を以下に定める。

### ① 子チームを大会登録できる条件

母体チームより子チームを大会登録し大会に出場させる場合、その大会に参加できる最高学年（例えば秋季大会では2年生）の登録選手が26名以上在籍し、かつ母体チーム、子チームの選手数がそれぞれ15名以上となり、十分な数の指導者がいること。

### ② 子チーム、選手、指導者の登録方法

子チームは、大会毎にその都度大会登録し独立したチームとして出場できる。ただし全国大会には、おなじ母体チームから2チーム以内の参加とする。選手、指導者の登録カードについては、母体チームのものをそのまま使用する。

### ③ 同一大会中および上部大会での選手、指導者の入れ替え禁止

日本協会や各連盟が主催する大会に登録し参加した子チームは、大会中母体チームおよび複数参加した場合他の子チーム間でお互いの選手、指導者を入れ替えることはできない。また、上部大会に結び付く大会（例えば日本選手権に結び付く夏季大会など）が終わった後、上の大会（日本選手権）で親子チーム間で選手の入替えはできない。

### ④ 子チームの会長、事務局長

子チームの会長、事務局長は、母体チームの会長、事務局長と同一としてよい。

### ⑤ チーム登録金

年度途中で子チームを大会登録した場合、その時点で日本協会への年次登録料(1万5千円)を納入する。連盟の登録金などは各連盟の定めによる。

### ⑥ チーム名、ユニフォームなど

子チームのチーム名は日本協会、各連盟の規程に基づいて決めることができる。親チームの末尾や冒頭にA、Bなどを付けるだけの場合、ユニフォーム・帽子類はそのまま使用することもできる。

# 一般財団法人日本リトルシニア中学硬式野球協会 野球用具の使用規程

一般財団法人日本リトルシニア中学硬式野球協会（以下「本協会」という。）が公認するメーカーが販売する用具を使用する。原則、購入時の用具を使用するものとし、改造したものの使用を禁止する。

## (1) 対象

本協会、所属連盟、支部、ブロックが主催する各種大会に出場するすべての参加者の用具に適用する。

## (2) 規格外の扱い

協議が必要となる事案が生じたときは、本協会、連盟で協議し決める。

## (3) ヘルメットに関して

① チーム統一のものでSGマーク（製品安全協会）の認証がある製品に限り使用を認める。有効期間は3年間。**SGマークの認証がある顎(あご)ガードつきヘルメット(捕手用を除く)の使用を認める。すでに使用・所有している顎ガードのないヘルメットに、後から顎ガードを取り付けることは認められない。また、SG基準を満たした顎ガードつきヘルメットであっても、使用者等が不正な改造(仕様上認められていないにも関わらずパーツを勝手に付け替えるなど)をしていたり、破損していたりする場合など、安全性を欠く場合には使用できない。**

② ひび割れ、保護ラバーに損傷のあるヘルメットの使用を禁止する。投球、送球、打球を受けた場合は、ひび割れや損傷があるかどうかただちに確認する。

③ チーム名、頭文字の表示は、いずれかを前頭部の1か所とする。側頭部の表示は禁止する。番号表示は側頭部、後頭部でも差支えない。

④ 色は単色で**原則**、黒、白、赤、紺とする。表面がつや消し処理された製品の使用も認める。

## (4) ユニフォームに関して

① チーム名、都道府県名または地名を胸や袖口に表示すること。くわえて自治体が公に認めている象徴等を胸や袖口に付けることを認める。

② 喪章はピン止めを認めず、縫い止めにする。

③ 生地廃番による素材の違い(同一カラー)の混在は認める。ただし移行期間は3年とする。

④ ツートンカラーは可とする。

⑤ ツートンカラーの解釈は、上着とズボンのことであるが、上下異なる色のユニフォームで背番号等を付ける刺繍色および肩、袖、脇に別色のラインや幅をもったライン(切り替えしも可:デザイン上はV字型)が入っているものは認める。この場合は、上下3色になる。

⑥ 公認メーカーの販売品と著しく違うオーダー品等を新たに作る場合は、事前にサンプルの写真かデザイン画等を連盟事務局に提出し規程の範囲内かどうかの判断を仰ぐこと。

⑦ 裾を極端に絞った変形ズボンは使用できない。ズボンの裾は足首まで下げてはならない。

⑧ 同一チームの監督、コーチ、選手は同色、同形、同意匠のユニフォームを着用し、そのユニフォームには6インチ(15.24釐)以上の大きさの背番号を付けなければならない。

⑨ 外国遠征時のユニフォームへ協賛企業の社名などの表示を認める。本協会が必要と認めた

場合は、国内でもユニフォーム、帽子等への表示を義務付けることができる。

(5) 帽子、アンダーシャツ、ストッキング、アンダーソックスに関して

- ① 帽子のチーム名、頭文字の表示は、いずれかを前頭部の1か所とする。側頭部の表示は禁止する。
- ② 各チーム同一、同色とする。生地廃番による素材違い（同一カラー）は認めるが、移行期間は3年とする。
- ③ ストッキングのミドルカット、ローカット、ボックスの使用は認めるが、ハイカットの使用は禁止する。

**④ ストッキングはユニフォームのスポンの下に着用すること。**

(6) ベルトに関して

ユニフォームの一部とし、同一チームのプレーヤーは同色のベルトを着用しなければならない。色についてはチーム全体が同色であれば特に定めない。

(7) スパイクおよび球場内で使用するシューズに関して

- ① スパイクおよび球場内で使用するシューズの色は、黒または白と別色のラインを認めるが、チームで統一すること（監督、コーチを含む）。
- ② 廃番による素材違いの混在は認めるが、移行期間は3年とする。
- ③ 足首防護目的のハイカットスパイク、ミドルカットスパイクの使用は認める。
- ④ スパイクは金具または、ポイント（プラスチック金具）スパイクの使用を認める。

(8) バットに関して

- ① 金属製バットはSGマークが入った硬式用に限る。
- ② SGマークが入ったコンポジット（複合）バットの使用は認める。
- ③ 木製バットの使用は認める。（色は黒、淡黄色系、ダークブラウン系とする。木目が見える程度の濃さとする）
- ④ マスコットバットは試合で使用できない。試合中はダグアウトに持ち込めない。バットリング、鉄棒類の球場への持ち込みを禁止する。

(9) グラブ、ミットに関して

- ① 際立った色（真っ赤、白等）の使用は認めない。
- ② しめ紐は長すぎないこと。長さは親指程度にする。

(10) 捕手用具に関して

- ① プロテクターの表面にチーム名の表示を認める。
- ② プロテクター、レガース、マスクの色は3色まで併用を認める。
- ③ ヘルメットとマスクの一体型の捕手マスクの使用を認める。
- ④ マスク(球審用含む)は、SGマーク(製品安全協会)の認証がある製品に限り使用を認める。**

(11) コート類に関して

コート類の着用においてはグラウンドコート、ウインドブレーカー、Vジャン、フリースなどタイプの違う商品（それぞれのタイプは同一デザインに限る）の混在は認める。**それぞれのフード付きは、プレー中の着用は禁止する。**

(12) 手袋に関して

- ① 色は黒、白、紺もしくは赤をベースに2色までのものとする。
  - ② 守備時、野手の手袋の使用を認める。
  - ③ 出塁時に一回り大きいサイズの走塁用の手袋使用は認めない。
- (13) リストバンド・リストガード、手甲ガードなどに関して
- ① リストバンド、リストガード、手甲ガードなど保護ガードの使用を認める。
  - ② 色は黒、白、紺もしくは赤色をベースに2色までのものとする。
  - ③ アームスリーブの使用を認める。投手以外については、片方の腕だけに着用することを認め、両袖の長さが違っていても公認野球規則 3.03 (e) に違反するものとはしない。投手が使用する場合は、両袖の長さは同一とする。なお、色はアンダーシャツと同色とする。
- (14) レッグガード、エルボーガード、**ネックウォーマー**に関して
- ① レッグガード、エルボーガード、**ネックウォーマー**の使用は認める。
  - ② 色は黒、紺、白のいずれか1色で統一する。ネックウォーマーは、あまりだぶつかないように着用する。
- (15) サングラスの着用に関して
- ① 必要に応じて審判員に申し出れば、選手のサングラス着用を認める（プラスチック製とし、**フレームの色は黒または紺とする**）。**サングラスの表面はミラー系の光るものは使用できない**。
  - ② 審判員と指導者のサングラス着用を認める。選手と同様にプラスチック製とし、**フレームの色は黒または紺**とする。指導者は審判員に申告し、審判員は球場の責任理事に申告し、許可を得ることとする。
  - ③ 眼下へのアイブラック貼り付けや墨などを塗ることは禁止する。
- (16) 保護ガードに関して
- 手首、足首をねんざした選手に限りテーピングと同じ効果が得られる保護ガードは、事前に審判員に申し出れば、使用を認める。
- (17) マウスガード（マウスピース）に関して
- 白または透明なものに限り使用を認める。
- (18) 用具の公認について
- ① メーカー毎の公認とする
- (19) その他
- その他用具を本規程以外で試合に使用する場合は、事前に大会本部に申し出ること。

## 附 則

この規程は、平成18年1月21日から施行する。

改正 平成28年 2月7日

〃 平成28年12月7日

〃 平成31年3月25日

〃 令和元年5月25日

〃 令和元年7月31日

〃 **令和4年3月2日**